



カントウータ

Cantuta

No. 37



サンタクルスの日本人会館 (撮影者 渡邊 英樹)

- | | | |
|----|----------------------|--------|
| 1. | 2018年8月：ボリビア旅日記（その3） | 渡邊 英樹 |
| 2 | 南米・ボリビアへ和食を！！ | 大角 公彦 |
| 3 | 美しかった紀宮様 | 岩永 有美子 |
| 4 | 私の南米との邂逅（かいこう） | 井上 和雄 |
| 5 | じゃがいもの旅の物語（連載26号） | 杉田 房子 |

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

1. 2018年8月：ボリビア旅日記

(その3)

日本ボリビア協会相談役

元海外移住事業団ボリビア駐在

渡邊 英樹

2018・8・12 記念式典から帰って

ホテルに戻ってベッドインしても沢山の懐かしい人々と会った興奮といろいろな思い出が次から次へと浮かんで来て、なかなか寝つかれない。それらを思い出すままに書き留めてみたい。日記の範疇を超えてしまうだろう。

式典では「ボリビア沖縄県人会名誉会員」の称号の授与まで賜った。こんな日が来るなどということは想像だにできなかった。実は、私がボリビアに派遣されたのはまったく違う目的であったからだ。



写真1-1 左から移住地発展の礎を築いた故幸地広さんの次女悦子さんの夫で旅行社を経営するハビエル儀武氏と広さんの弟で貿易業を営む幸地哲雄氏と筆者

サンファン旧債

そもそも、私がボリビアに派遣されたのはコロニアオキナワの再建を図るということではなく、「サンファン旧債」と称された不良債権の回収を図るという密命を帯びてのことであった。1960年代に入る頃にはサンファン移住地のすべての農家が米の販売収入で生計を立てていたと言っても過言ではない。そのため米の品質を保ち、なおかつ、収穫期直後の米価の安い時の出荷を避けて

高値の販売を図るために、海外移住振興株式会社(全額政府出資)から約63,000ドルの融資を受けて精米機と乾燥機を設置した。



写真1-2 幼かった長女が泊りがけで遊びに行っていた渡久家の政得氏と筆者親娘

また、当時、コロニアオキナワも1戸当たり10ヘクタール位の米を栽培して米作が主幹作物となっていた。原生林や再生林に火を放ち、山焼きをして木株の間に陸稲の種を落として埋めて込んでいき、収穫は穂先だけを摘んでいく、いわゆる焼畑農法だった。そこから、この精米所の運営と米の販売の効率化を図ろうとする構想が持ち上がり、サンファンとオキナワの両コロニアの連合により1963年11月に「日生連(日本人移住地生産物販売連合会)」が設立された。

ところが、これは、構想だけは立派であったが、計画は、極めてずさんで甘いものであった。肝心の乾燥機の処理能力が、増産され続ける生産米の半分にも対応できなかったからである。しかも、日生連の担当者は処理の遅れへの不満と圧力に負けて、十分な乾燥をせずに出荷してしまったのである。これが災いして、日本人の生産米は劣等米と評価されてしまい販売価格は下落。さらには精米と乾燥が間に合わないことを見越した組合員が、組合と日生連を通さずに外部の精米所を利用して抜け売りをせざるをえない事態となり、発足後、僅か10ヶ月で日生連は崩壊した。

悪いことはなお続く。この渦中で、サンファン

農協の役員による金銭横領という事件が起こった。その責任と日生連の責任問題を巡って移住者間の対立が激化した。その確執はすざましく、半数以上の役員経験者とその家族が日本へ帰国したばかりでなく、その役員と対立したほとんどの人々も移住地の将来に失望して帰国するか、他所に転住するという事態になった。

移住者同士間、組合と移住者間、さらには組合役員の人事に介入した事業団の所長の不手際もあり、移住地と事業団の間の三つ巴の相互不信は極限に達した。

日本人は天災に対しては、自然災害大国の長い歴史の中で「どうしようもない」という諦観の境地の中から再建・再出発に動き出せるDNAをもっているが、人災は、人の心を重くして、怒りと失望感が心を折れさせる。コロニアサンファンとオキナワの双方でこの頃から移住地を去って転住する人が増加した。

新たな出発のためには1964年11月末までの債務を各組合員に均等に分け、旧勘定として棚上げして、新勘定をもって組合の再建を図るということ以外に方法がなかった。これが「サンファン旧債」と言われるものである。コロニアオキナワの農家も同様に大きなダメージを負った。

債権回収の内命

こんな因縁のある債務を返済する意欲が、各農家に湧いてくるはずもない。事業団も「移住地が豊かになってからで良い」と、ことさらに回収を急ごうとはしなかった。ところが、実に厄介な問題が招来したのである。ボリビアばかりでなく、どこの国の日本人移住地もインフラ未整備の土地で悪戦苦闘を強いられていた。当然の結果として、事業団の債権回収は惨憺たる結果であった。

ところが、この遅々として進まない債権回収に時の大蔵省が業を煮やしたのだ。まだまだ日本の国力が充分とはいえない時代、国民の血税を使っての貸付金を回収せずに、貸付予算を増やすということ

ができなくなったのである。大蔵省が、「回収実績+X万円=総貸付額」として回収額がゼロであればX万円しか貸付ができなくなるという「純増計画」という足かせを課してきたのである。

この足かせで一番困るのは「サンファン旧債」と名前まで付けられて棚上げ状態の債務を抱えていたコロニアサンファンであった。コロニアオキナワも事業団の管轄下になってから借り入れた債務を延滞のままにしてはサンファンと同様に大きな金額の借り入れは望めなくなった。

この硬直化した債権債務の関係を流動化させて、回収を増やし、資金供給を増やして農業規模を拡大してやらないことには、サンファンとオキナワの発展は望めなくなる。「それをどうにかしろ」という内命であった。

日本を出発するに当たっては上司から「とにかく筋を通してやれ」と叱咤激励を受けた。しかし、どうやって回収を図るか？ほとんどの農家はまだまだ力がなく、道路事情が悪く農産物の出荷も、ままならない状況だった。サンファン移住地の幹線道路は36キロであるが、長雨によってドロドロになる。そこを農産物出荷のためにトラックやトラクターが運行するので深い轍ができてしまう。

そして、コロニアサンファンだけでは道路監理ができなかった。奥地に入った伐採業者が重い材木



写真1-3 轍が深くえぐられた幹線道路で動けなくなったトラックと出荷が出来ずに道路に放置されたままの米袋
(1970年サンファン移住地で筆者撮影)



写真1-4 轍に片側のタイヤがハマって動けなくなった4WD。
ワイヤーを近くの立木にくくりつけてウインチで脱出を図る。
4WDの天井は蚊で真っ黒になった。

を積んで強引に通るからである。通行止めにしていない場所を銃を突きつけて通るなどということが横行した。

陸稲に代わって基幹作目に育ちつつあった養鶏も、ズタズタにされた道路に鶏卵の出荷を阻まれて、卵を腐らせてしまうなどということが度々起きた。ムシロ旗を立てた移住地の陳情団が領事事務所と事業団支部を取り囲んだこともあった。

陳情の中には、戦後の日本のおかれていた経済・社会情勢とはいえ、十分なインフラ整備も行わずに移住を推進した旧日本海外協会連合会とそれを監督する外務省・日本政府への非難と責任追及の意味も込められていた。「早急な解決策などはない」ということは誰にでも分かっている、どうにもならない苛立ちから抗議せざるをえないのであった。

かつて、故白石健次支部長がサンファン移住地の現場で道路にガソリンを撒いて火を放ったことがあった。それを見て、したり顔に「そんなことをしても無駄」と言い放った職員を烈火の如く怒ったという。そんなことが無駄なことは農業土木が専門の白石さんが一番分かっていたことであつた。誰もが、充満した不満のガス抜きを必要としていた。こんな時に逃げたら終わりである。誰からも信用されなくなる。一緒に悩んで、一緒に知恵を絞る絞ることが一番大切なのであつた。

私にもこんな経験がある。やはり支部で20人位のサンファンからの陳情の方々と対応した時である。何が出来るか？ほんとうに困り果てた。そして苦肉の策として思いついたのが、ボリビア空軍に、鶏卵搬出のためにヘリコプターの出動を依頼するというのであつた。元空軍パイロットであつた職員のオスナ氏を呼んで、皆さんの前で空軍に電話をしてもらつた。その答えは、「バカヤロー！この空軍に何台ヘリコプターがあると思っているのか？たった2台しかないものをそんなところへ出動させられるか！」というものであつた。それを聞いた陳情団の皆さんの方が、むしろホッとした顔になって帰っていかれた情景が昨日の事のように思い出された。そんな状況の中で債権回収を図るといふのは本当に難題であつた。

頂上作戦

苦慮の結果「頂上作戦」と名付けた回収方針を打ち出さざるをえなかつた。明らかに資金力のある人には強く返済を迫り、そうでない人には、少額ずつでもよいから返済してもらふように説得して回るということである。有力者達からの強引な回収を図るため、コロニアの中の宿舎に住んで家族生活をしているサンファン事業所の職員に任せる訳にはいかない。発案者の私自身がこの役に当たらざるを得なかつた。強烈な反発にあつたことは言うまでもない。

サンファン組合の総会に出席した時には朝から晩まで一日中、吊るし上げにあつた。しかし、不思議なほど冷静に対応できた。それは、「国の失政がなかつた」とは言えなかつたし、もし立場が逆であつたら、私はもっとひどいことを言っているに違いないと思えたからであつた。ただ、それだけでは止まらず、私に対する誹謗中傷は東京本部にまで及んだ。

ところが「芸は身を助ける」ということが起きたのである。私は、少年相撲の横綱を張っていて、小学校の昼休み時間の間、勝ち抜き戦を一度も負けず

に午後の始業ベルを聞いたこともあり、高校時代はダンベルとリヤカーのチューブで筋肉トレーニングをして、毎日6000メートルをクロールで泳いでいたので、体力には自信があった。

当時サンファン祭の一番の人気は相撲大会で、大相撲の元幕下力士であった鎌田司さんの指導で高く盛り上げた本格的土俵が作られ、勝負を見ようとする沢山の見物客で周りは埋め尽くされた。私も飛び入りで参加して、ことごとく対戦相手を負かして、最後はサンファン横綱との対戦になって、その方をも破ってしまった。すると観衆の目が、いっせいに鎌田さんに注がれて、事業団の若造を破って雪辱を果たしてくれと促しているのだった。

この時、50歳近かった鎌田さんはとっくにサンファン横綱を返上して引退していたが、土俵に上がらざるを得ない雰囲気には押されて出て来られた。相撲はやったものなら分かるが、組んだ瞬間に相手の実力は肌で感じる。私は、咄嗟に「この人の名誉を汚してはいけない」と判断して持久戦法に持ち込んだ。そして水入り。再びの対戦も水入りとなって、鎌田さんの息の上がりを見た行司が引き分けとして勝負を終わらせた。恐らく鎌田さんは私の気持ちを察してくれたのだと思う。なぜならアンチ事業団のボスの存在であった鎌田さんが「渡邊にはケンカを売るな!」と言ってくれているという情報がもたらされたからである。多分、それは、ブル池こと事業団の土木工事班の班長であった池田篤雄さんからだったと思う。「ありがたい!」と思ったことは言うまでもない。

その後の回収業務は順調に進んだが私のしたことはほんのわずかである。ほとんど全ての債務の返済を図り、資金の回転の流れを作ったのはサンファン事業所で融資を担当していた坂口清さんと故小林正人さんの誠実な、たゆまぬ努力の賜物であった。

「旧債を返済しなければ、新規の融資が受けられなくなる」という理解が、移住地の皆さんにも浸透していった。その情報はコロニアオキナワにも伝わり力のある人が率先して返済してくれるようになって

た。その結果、1969年の3000万円から1974年には1億円へと貸付予算を増やすことができたのだった。

ちなみに、小林正人さんは長野県立野沢北高等学校の私の一年先輩である。小林さんが応援団長、私は学校の運動会のすべて仕切る運動部長という間柄で、真冬でも素足に高下駄、腰に手拭を垂らした小林さんを自転車の後ろに乗せたことが何度かあった。小林さんは先輩風を吹かすことなく、私のために身を粉にして協力してくれた。感謝の気持ちは今も薄れることはない。

ブラジリアに駐在していた時に胃がんを発症して亡くなられたのが、残念でならない。幼い子供さん達を残しての42歳の旅立ちであった。合掌。

(次号へつづく)



写真1-5 手前の第2環状線に隣接するトロンペーリヨ空港上空からサンタクルスの中心部を望む。(1969年筆者撮影)



写真1-6 現在のサンファン移住地の幹線道路
(2018年8月筆者撮影)

2. 南米・ボリビアへ和食を！！

元在ボリビア日本大使館公邸料理人

大角 公彦

(おおかどきみひこ)

初めて知った「ボリビア」という国

「え！？ボリビアって海がないんだ！」

世界地図を見て、私は思わず声をあげた。憧れの公邸料理人。正直、赴任地はどこでもよかった。約1年に及ぶ“就活”の末、最初に内定をもらったボリビアに、迷わず行くことを決めた。赴任が決まって初めて知ったボリビアの場所。日本からの距離約1万7千km。広大な南米大陸の内陸国。まさに地球の反対側だ。板前になって12年。魚の扱いには自信を持っていた。「海のない国で果たして和食が作れるのか。」渡航まで2ヶ月を切っている。少しの不安と、やるしかないという思いが、私を奮い立たせた。

公邸料理人とは、世界各国の大使館や総領事館で、現地地の政財界要人や日本からの賓客をもてなすための食事を提供する調理師のことをいう。こうした会食が日本の外交に大きく貢献していることから、別名「味の外交官」とも呼ばれている。私が公邸料理人を知ったきっかけは、小さな新聞広告だった。和食の名店やホテルなどでキャリアを積みつつも、

30歳になるまでには一度海外で仕事をしてみたいと考えていた私にとって、その広告は新しい世界へと続くドアのように思えた。

いよいよボリビアへ赴任

2010年10月、ついに渡航の日が来た。飛行機を乗り継ぐこと2回、計40時間の道のりを経て、私はボリビアの首都・ラパスに降り立った。高山病の洗礼を受けながらも、今まで見たこともないほどくっきりと青い空、手が届きそうな位置にぽっかりと浮かぶ白い雲、背景に聳える6000m級のイリマニ山、どこまでも広がる荒涼とした大地、崩れそうに立ち並ぶレンガの家々、ここが本当に異国の地であることを実感した。

次の日から、大使館の日本人職員に案内してもらいながら、市内の市場を回った。見たこともない野菜や市場のボリビア人の迫力に驚きながらも、まず困ったのは、言葉が全くわからないことだった。英語は多少できたが、ボリビアでは英語は全くと言っていいほど伝わらない。そして私は、全くスペイン語ができない。そもそも習得しようにも、元々勉強は苦手なタチ。覚えては忘れる繰り返しだった。

しかし、慣れれば通じるものだ。毎日市場に通ううちに、売り子たちとも仲良くなっていく。いつのまにかカタコトのスペイン語とジェスチャーでも、会話ができるようになっていた。そうこうしているうちに、今度は売り子たちがどこで覚えたのか、野菜の名前を日本語で言うようになってきた。「セニョール・キミ、ニンジン！」「テネモス タマネギ」など、声をかけてくるのだ。彼女たちに感謝するとともに、言葉は通じなくても、どうにかして伝えようとする気持ちが大切なのだ実感した。

次に苦労したのが、予想通り和食に使える食材の少なさだ。海のないボリビアでは、新鮮な海の魚介類を手に入れるのは至難の技。そのかわり、汽船が航行できる湖では世界最高所のチチカカ湖でとれるトゥルーチャ(ニジマス)やペヘレイ(イワシの一種)などの淡水魚が店に並んでいたが、これらは

やや泥臭く、刺身で食べるには向かないものが多かった。日本の調味料や食材も市場にはなく、これらからどうしたものかと途方にくれた。しかし、現地のボリビア人や日系人から少しずつ情報を得られるようになってくると、新鮮な淡水魚を仕入れられる店、日系人が経営する日本の食材が手に入る店、隣国のチリなど海外から魚介類を輸入している店など、様々な人々とのつながりが持てるようになって、有用な情報も得られるようになってきた。

実はボリビア料理から学ぶことも多かった。魚介類は乏しかったが、牛肉、豚肉、鶏肉を使った、地域ごとに特色のある料理の数々には感心させられた。また、大使館勤務のボリビア人職員が振る舞ってくれるバーベキュー（パリジャーダ）は、実に豪快で日本で食べるものとは全く異なる美味しさだった。さらに、数あるボリビア料理の中でも私が一番気に入ったのは、サルテーニャだった。サルテーニャは朝食やおやつとして食される軽食で、小麦粉で作った生地で牛肉や鶏肉などを煮込んだ餡をくるみ、オーブンで焼いたものである。専門店はもちろん、公園や道端の屋台でも売っており、店ごとに異なる味付けで、お気に入りを探すのも楽しかった。サルテーニャに魅了された私は、友人に紹介してもらった「サルテーニャ作りの達人」に、1週間ほど“弟子入り”して作り方を習得したほどだ。様々なボリビア料理を学んだことで、和食しか知らなかった私の料理に広がり生まれたように思う。

ボリビアでの料理：様々な試行錯誤の連続

ボリビアで料理をする中で、予想外に私の頭を悩ませたのが「気圧」だった。中心街の標高が3600mと富士山の頂上に匹敵する高所のラパスでは、お湯が85度ほどで沸いてしまう。沸騰しているのに、実際の温度は日本で調理するよりもだいぶ低いのだ。そのため、パスタを茹でようにも芯に火が通るころには外側はぐちゃぐちゃになっているし、米を炊こうにもどうしても芯が残ってしまう。困った私に知恵を貸してくれたのは、大使館で働く

日本人職員だった。「圧力鍋を使えばいいよ」とのこと。聞くと、現地ではみんな圧力鍋を使いこなしているらしい。さっそく圧力鍋を買ってきて調理すると、パスタも米も驚くほど美味しく仕上がった。困った時は1人で悩まず、人の助けを借りる。日本で強がっていたころの自分にはできなかったことだったと思う。



写真2-1 2011年天皇誕生日レセプションでの大使館職員一同

大使館で催される会食のための調理は、試行錯誤の連続だった。ボリビア人の中には、和食を全く食べたことのない人も一定数いる。特に刺身に警戒感を抱く人は多かった。ゴボウを見て、「これは木の枝だから食べられない」と言った人もいた。また、ベジタリアンや偏食の人も多く、食事の用意を万全にしておいても、突然「魚介NG」「肉NG」などの要望が入ることもあり、頭を抱えた。しかし、会食を終えた多くのボリビア人が「今まで食べた和食の中で一番美味しかった」「今日ここに来て本当によかった」「日本の素晴らしさがわかったよ」などの声をかけてくれ、日本で働いていた時には感じたことのない、心の底から湧き上がるような喜びを感じることができた。また、大使から「今日も大角くんの料理のおかげで話が弾んだよ。ありがとう」などと声をかけてもらって、一日の疲れが一気に吹き飛ばすような達成感を味わったものだった。

たくさんの嬉しいことの反面、料理人として忘れられない出来事もあった。ある日、いつものようにボリビア人を招き、公邸で会食が催された。和や

かに食事が進む中、ゲストのボリビア人女性が突然苦しそうに息をし始めた。彼女の顔はみるみる真っ赤になり、呼吸はどんどん荒くなる。急いで大使館勤務の医務官を呼んだ。医務官は彼女を見て、「魚介アレルギーのようです」と言った。ボリビア人の中には、魚介類を全く口にすることがなく、自分が魚介アレルギーということを知らない人もいるのだ。幸い彼女はすぐに回復したが、知らなかったとはいえ、料理人としてとんでもないことをしてしまったという後悔の念とともに、人に食事を提供するということの責任の重さを改めて痛感した。あの日のことを思うと、今でも血の気が引く。一生忘れないうし、忘れてはいけない出来事だと思っている。



写真2-2 大使公邸でボリビア人職員と会食の準備



写真2-3 料理教室で巻き寿司の作り方を伝授

ボリビアに和食を広める：料理教室開催

公邸料理人としての仕事とともに、力を入れたのが「料理教室」だった。現地のボリビア人を対象に、簡単な和食の作り方を教えるのだ。参加者が楽しめるように、実際に寿司を巻いてもらったり、刃渡り数十センチもある柳刃包丁で刺身を切ってもらったりした。この料理教室は非常に好評で、大使公邸で開催するほかに、ホテルで大々的なイベントを行ったりして、マスコミにも取り上げられた。シャイな少年が楽しそうに寿司を巻いたり、気難しそう男性がはしゃぎながら柳刃包丁を握ったりと、和食を通して人と人の交流が生まれることに胸が熱くなった。



写真2-4 料理教室で柳刃包丁の使い方を説明

「公邸料理人としてボリビアに来て、本当によかった」心からそう思った。ボリビアでは、たくさんの友人にも恵まれた。ボリビア人は物静かな反面、打ち解けると実はラテンの陽気さも持ち合わせていて、その二面性が実に魅力的だった。

休みの日には、ボリビアだけでなく南米中を旅した。日本とはスケールの違う大自然、悠久の歴史を刻む文化遺産、食べたこともない料理、多くの人々の優しさに触れることができた。大いに楽しみ、大いに悩み、人間としても成長した2年間だった。そして2012年10月、私は任期を終え、帰国の途についた。「さようなら、キミ」と言う友人たちに、私は言った。

「絶対またここに戻ってくるよ」



写真2-5 料理教室で出汁巻き卵の作り方を伝授

和食を通じてボリビアに恩返しする夢

帰国から8ヶ月後の2013年6月、私は東京・渋谷に「日本料理いまここ」をオープンさせた。帰国後の進路には非常に悩んだ。日本で働き口を紹介してくれる人や、海外の話を持ってきてくれる人もいた。しかし、私は自分の店をオープンさせることを選んだ。ボリビアで、“深化”した私の和食を、たくさんの人に味わってもらいたかったからだ。ありがたいことに、多くの心温かいお客様に恵まれ、好評をいただいている。また、渋谷という場所柄、外国人のお客様も多いが、こうした方々にも喜んでいただけているのは、ひとえにボリビアでの経験が大きいと感じている。

今、私には夢がある。和食を通じてボリビアに恩返しをしたいのだ。手始めとして、ボリビアから輸入したキヌアやアマランサスなどを、和食風にアレンジしてメニューに組み込んでいる。まだまだ日本でなじみのないボリビアの食材を、和食を通じて広めたいと思っている。

そしていつの日か、ボリビアに和食の料理学校を作りたい。今、世界は空前の和食ブームであり、和食の料理人はどこも不足している。和食の技術と心を習得したボリビア人が、世界中どこでも働けるように支援したい。

これがいつの日か、必ず実現させたい夢だ。ボリビアに恩返しができるよう、自分自身一步一步前進していきたい。(終わり)

3. 美しかった紀宮様

元 JICA 日系社会青年ボランティア
(現日系社会青年海外協力隊)

岩永 有美子

本年2019年のボリビア日本人移住120周年に関する日本の様々な報道を通して、日系社会、特にオキナワ移住地の懐かしい風景や日系社会の皆さんの顔を拝見して、とてもうれしく思った一人である。

私は1997年から2000年までの3年間、JICAの日系社会青年ボランティアとして「コロンビア沖縄農牧総合協同組合(CAICO)」で活動をさせていただいた。任期中に日本人移住100周年を迎え、配属先の農協で『CAICO NEWS』という組合誌の編集・発行に携わっていたこともあり、サンタクルスとオキナワ移住地における式典などの関連行事の撮影を担当し、式典出席のためにボリビアをご訪問された紀宮清子内親王殿下に同行させていただく機会に恵まれた。



写真3-1 日本人移住100周年の様子を報じた『CAICONEWS』。
筆者がJICAボランティアとして編集を担当

紀宮様とは同世代であるが、当時の私はあまり日本の歴史や皇室に関心を持っていなかった。ボランティア活動の性質上、サンタクルスのメディア関係者に知人が多かったのだが、数名の記者から、「自分の国に皇室が存在するのはすごいことだよ。それはずっと独立国で、植民地になったことがない証拠でもあるから」などと言われ、改め

て日本の歴史、皇室の存在の大きさに気づかされた。

この度の120周年において、眞子内親王殿下はカトリック系修道会の日本人シスターが中心になり、サンタクルス市内で運営している乳幼児の養護施設であるオガール・ファティマを訪問された。そのとき、近寄ってきた少年を抱きしめる場面が日本でも報道されていたが、私はそれを見て、紀宮様の時のことを思い出さずにはいられなかった。実は20年前、この養護施設を紀宮様も訪問されていたのである。

あのとき、当時貧しい人たちの住まいが立ち並ぶ環境の中にあつた養護施設の入り口には、日本のプリンセサを一目見ようとする人たちであふれていた。そのようななか、警備を担う軍関係者が住民の前に立ち、車から降り、養護施設に入る紀宮様をガードする手筈になっていた。しかし、紀宮様が車から降りたとたんに、興奮した住民たちが軍関係者を押しつけ彼女を取り囲んでしまったのだ。

現場から少し離れ、カメラを構えていた私は周囲の記者たちと「ああ…なんてことだ」と思わず言葉を漏らしてしまった。だが、次にカメラのファインダーから見た光景は目を見張るものだった。紀宮様は驚く表情も見せず、にこやかに笑顔を見せ、群衆の中で、1本の花を握っていた5歳くらいの少年に近づき膝を折り曲げ、少年の目線に合わせた。そして花を差し出した少年にニコリ笑い、少年をぎゅっと抱きしめたのだ。私はカメラのシャッターを切りながら、なんと素晴らしいプリンセサなのだと思うにはいられなかった。

それは周りのボリビア人記者たちも同様だったようで、「あんな風に自分がいきなり群衆に囲まれたら悲鳴をあげそうだ」「服も泥だらけの少年をあんなに優しく抱きしめるなんて自分ではできない」「やっぱり日本のプリンセサは立派だ」などと口々に言い、翌日のボリビアの新聞やテレビは紀宮様の振る舞いや人柄を熱心に報じる報道で一色

になった。

現在は降嫁され、内親王から黒田清子さんとなられたが、今から20年前のボリビア移住100周年のサンタクルス訪問の時に見せてくださった紀宮様の美しさはずっと忘れないだろう。そして私はボリビア滞在中に会った日系人やボリビア人の温かさをこれからも決して忘れないだろう。

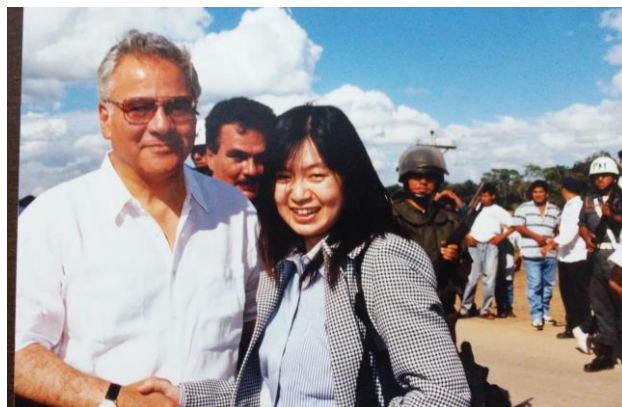


写真 3-2 日系社会のおかげで、様々な取材の機会に恵まれた。オキナワ移住地を訪問された74代大統領時代のゴンサロ・サンチェス・デ・ロサーダ大統領と筆者



写真 3-3 サンタクルス市内の農業イベントに参加された75代大統領時代のウゴ・バンセル・スアレス大統領と筆者

(終わり)

4. 私の南米との邂逅(かいこう)

国際開発コンサルタント・元衆議院議員

井上 和雄

私が初めて南米の国を意識したのは、いまから40年前、アメリカ西海岸のオレゴン大学に留学していた時だった。アメリカの大学では、学生はキャンパスの寮に住むのがほとんどなので、週末は学生のための様々なイベントに開かれる。平日は勉強に追われているので、ゆっくり羽を伸ばせるのは週末、それも金曜日の夜から土曜日までで、日曜日の午後からは多くの学生は図書館に行き勉強を始める。貧乏留学生の私は、週末を楽しむお金などなかったので、キャンパスで行われる音楽会や映画などを主な楽しみとしていた。その頃のある週末に友人と一緒に見に行ったのが、南米の文化を紹介する映画だった。そこで見たのが、奇妙な帽子とポンチョを被った高原に住む人々だった。いまから思えばペルーかボリビアの先住民だったと思うが、当時はそんな知識もない。一方で、映画に流れる音楽はとても魅力的であった。そして面白そうな国だなどの印象は残り、それ以来、いつかは南米で仕事をしてみたいとずっと思っていた。ずいぶん昔のことだが、今でも鮮明に映画のシーンが目に浮かぶ。

その後、国連に採用されて、初めての赴任国は南米ではなくインドであった。1980年代初頭のインドは、首都のニューデリーにすら日本料理は1店しかなく、とても生活を楽しめるような土地ではなかったが、半面、国連職員としての仕事は山積しており充実した職場であった。テレビもない生活で、読書だけが唯一の楽しみで、特に、海外での商社マンの活躍を描いた深田祐介氏の「炎熱商人」や「革命商人」は私の愛読書であった。3C（チリ、コスタリカ、コロンビア）が美人で有名な国であることや、チリのアジェンデ政権の悲惨な結末もその頃初めて知った。

結局、インドには8年間いて、その後、ニューヨークの国連本部に転勤になった。人事部で中南米地域の人事を担当することになり、南米と本格的な関

係がスタートすることになった。当然ながら南米担当の部署には多くの南米出身者が働いていた。私のボスはペルー人で、その関係で秘書連中もペルー人が多かった。

私は当時スペイン語はあまり出来なかったので、中米グアテマラのアンティグア市にあるフランシス・マルキーンというスペイン語学校へ語学留学をした。ここは、国連だけでなく、米軍や国務省、CIAも職員研修に使っているスペイン語教育ではたいへん有名で学校で、マンツーマンで約1か月みっちり勉強し、日常会話はなんとかこなせるようになり、そこからニカラグアなどの近隣国に出張して独りでも何とか旅行することができた。当時のニカラグアは内戦が終わったばかりで、ホテルにいても夜間には銃声が聞こえるような治安状態で、同じホテルには、アメリカの軍人達も宿泊していた。

仕事仲間には、何人かボリビア人もいた。一般に南米の人はたいへん陽気で明るい人が多いが、ボリビア人は日本人に似ていて控えめだが、とても真面目で性格がいい人が多いと思った。そして結局は、そこで知り合ったボリビア人女性と結婚することになり、私とボリビアとの関係が始まった。

家内（ノエミ）と結婚して初めてボリビアを訪問した時、人々がたいへん穏やかであるのに驚いた。

時間がゆっくりと流れ、人々のはのんびり穏やかに暮らしている。あくせく働かなくてはならない日本とは大違いである。スペイン語もとてもゆっくりとした話し方をする。まくし立てて話す人もいない。ボリビアは南米でも貧しい国ではあるが、精神的にはとてもリラックスできる場所で日本人ももっとその暮らしから学ぶ必要があると思った。

ボリビアの町を歩いていると、日本の友人に瓜二つの人を見かけることがある。日本人と南米人には、共通な遺伝子があることはよく知られている。今から約8000年から1万年前には、ベーリング海峡は海ではなく地続きであり、アジアから徒歩でアメリカ大陸に移住してきたために、南米人が縄文人の遺伝子を持つに至ったようである。その意味で

南米のボリビアは日本人にはたいへん親しみやすい国であり、私は、ボリビアの家族が大好きだ。甥や姪たちも外国人であってもボリビア人と同じ様な感じで私と付き合ってくれている。

93歳で亡くなった義父は、ボリビアの英国系鉄道会社で働いてきた教養人で、ピアノやギター、アコーディオンなどの楽器演奏がたいへん上手だった。楽器などまったく出来ない私から見れば、とてもうらやましく尊敬した。義父の様にあの年齢で楽器の演奏のできる日本人はほとんどいないと思う。義母は、主婦であるがボリビア女性の特技である刺繍がとても上手で、私の娘が小さい時にはその服はすべて義母が縫ったものだった。家内は姉が1人、兄と弟が1人ずついるが、それぞれ結婚して子どもがいるので、私の娘には7人の従妹がいる。娘が小さい頃から従妹達がよく遊び相手をしてくれたので、今でもボリビアに行って従妹達と会うのを楽しみしている。それは特に私の兄弟には誰も子どもがなく、娘にとって日本にはひとりも従妹がないこともある。私の小さい頃の日本では大家族で、多くの従妹と一緒に遊んだ思い出があるが、家内の母国のボリビアには昔の良き日本のような家族関係がある。

ボリビアには戦前戦後に日本から多くの移民が移住した関係で、日本にはその子孫であるかなりの数の日系ボリビア人が住んでいる。また、ODAなどでボリビアに勤務した日本人がボリビア人と結婚している場合もある。また、日本にはボリビア以外の南米出身者も多く住んでおり、家内も南米の友人には事欠かない。そこで、私たち夫婦は日本と南米のコネクションを生かして、友人達とNPO日本ラテンアメリカ友好協会を設立して、日本と主にボリビアとの文化交流の活動を始めた。

台東区の「上野夏祭り」や、新宿区の「踊りの祭典」など、自治体が国際交流活動を推進しているので、出番は沢山ある。ボリビアにブラジルのリオ、ペルーのクスコと並ぶ南米3大カルナバルのひとつである「オルロのカルナバル」があるほど、ボリビ

ア人はダンスが好きである。また、そのダンスも文化的にとっても豊かな背景を持ち、独特のダンスである。そこで、毎年多くの在日ボリビア人の方々にもこれらのイベントに参加してもらって、ボリビアの文化を紹介している。日本の方々にはとても好評である。近年ボリビア自体の知名度がウユニ湖のお陰で高くなっていることも関係しているかも知れない。



写真4-1 カポラレスの衣装を着て家内のノエミ(後列左から4人目)を囲む在日ボリビア人グループ

特に素晴らしいのは、子供たちも男女にかかわらず幼少からボリビアの伝統的なダンスを習って、イベントに参加することである。私の娘もチャランゴを習っていて、イベントで演奏する機会があった。日本に住みながらも、ボリビアのダンスや音楽を知って自分のルーツを忘れないようにすることは、子供達の人生を将来豊かにする上でとても大事なことである。私達のNPOがそのような機会を提供できていることはとても幸せであり、今後も引き続き頑張って活動を続けたいと思う。特に最近では、地域の町会や銀行などからも、ボリビア文化の紹介を依頼されることが増えてきた。来年のオリンピック・パラリンピック開催の影響もあると思うが、国際交流活動が地域のグラスルーツにまで浸透してきていると思う。

また、在日ボリビア人、日系人の子供たちは日本語とスペイン語のバイリンガルが多い。母親がスペイン語を話すかどうかによって子供のスペイン語

能力は大きく異なるが、幼少の時から意識して、スペイン語の世界やボリビアの文化に触れさせることが、スペイン語の習得にも大きく影響する。グローバル社会では、外国語を話せることは人生で大きな武器になる。日本語とスペイン語の二つの世界に住む子供たちが、将来世界で大きく羽ばたくことが出来る様に、子供たちのスペイン語学習のサポートもしていきたいと思う。

たまたま留学先の大学で見た映画が契機となって始まった私と南米の関係であったが、ここまで深い関係になるとはまさしく人生の不思議であった。この縁を大事に、今後も日本と南米、そしてボリビアとの交流関係の深化・発展に尽くしていきたいと思う。

(終わり)

5. ジャガイもの旅の物語 (連載26号)

旅行作家

杉田 房子

第6章 (アジアへの道 ; 続き)

東方世界でオランダがポルトガルをだし抜けたのは、ジャガイものお陰かも知れなかったのである。しかし、ジャワ島西端のバンテンに着いた最初のオランダ人は、ひどい目にあつた。バンテンはイスラム教徒が多いところだが、このあたりで最も賑やかなマラッカ港を1511年に占領したポルトガル人は、イスラム教徒を追放している。そこへ、同じような白人がインド洋横断の長い航路にへとへと姿で現れたのだから、なぶりものにされた。

「食料は無限、家畜も豊富、金銀、香辛料などつきることなし」と記したのは、1513年にジャワ海の島々を三か月めぐり歩いたピレスだが、1596年にバンテンに着いたオランダ人は監禁されたり、交易を拒まれたり、命からがら逃げ帰った。何しろ、乗組員249人のうち帰国したのは89人にしかすぎない。

ところが、帰国した者の話は、逆にオランダ人を

奮い立たせた。「丁香、胡椒などはジャワより東にあるマルク(モルッカ諸島)に産するが、ポルトガル人もまだそこまでは支配していない。「キタイ(中国)やジパング(日本)にもポルトガル人はいっているようだが、やはり支配していないし、交易さえまだ成功していない」

「第一、ジパングはヤパン島というのが本当だそうだし、そこで作られる金銀の細工物は東方でも最も素晴らしい」

コロンブスやヴァスコ・ダ・ガマだけでなく、ヨーロッパ人すべてにとって最終の目的地であり、夢と期待と欲望の的だった中国と日本を目指しての競争が、まだ終わっていないのに気が汗かいたのだった。

1598年の八隻を皮切りに、オランダ船はジャワに殺到し、そのため、丁香をはじめとする貴重な香辛料も本国では値下がりしてしまうほどになるが、往復すると平均14か月がかりの航海を支えた食料は、固パンとジャガイもとサツマイモ、それにのちに加わったトウモロコシとキャッサバだった。小麦から作る固パンを除いては、南米のアンデス山脈を故郷とするジャガイもをはじめとして、いずれも新世界からもたらされた食料が、東方世界への最後の挑戦を支えたことになる。

実際、サツマイモとキャッサバは、そののちはジャワ人の主な食物にさえなった。オランダ人がやはり新世界から持ってきたコーヒーと煙草の栽培を急いだあまり、田圃をつぶされて米がとれなくなった1848年から50年までの飢饉を救ったのは、このサツマイモとキャッサバだったと伝えられている。

サツマイモに比べて甘味のないジャガイもは野生同様なのに山ほどとれるヤムイモと味が似ているというので、ジャワ人には喜ばれなかったが、オランダ人は栽培して航海の船には必ず積んだ。保存の仕方さえ心得ていれば、一年以上も保つ食物なのを知っていたからである。バンテンの東、チリウソ河口のジャカトラにオランダ人が築いた港町か

ら、オランダ船が出帆していくのを見ると、奴隷のように酷使されたジャワ人は囁きあった。

「ジャカトラのイモを積んで、ベランダ(オランダ)人はみんな去ってしまえばいいのに」

第7章 シルクロードとジバングと

マラッカ海峡を、落日が黄金色に染める。ヨーロッパ人がアウレア・ケルソネズ(黄金半島)と呼んだのは、この海峡沿い産みだされる金と、遠くはヤパン(日本)、近くはインディア(インド)から集まってくる金とに因んだものだが、夕焼けに染まる海と空と陸そのものが、黄金半島というにふさわしい。

マラッカの港町で、ジャガイモもまた赤く染まっていた。マレー人は、夕闇が迫るとパタと呼んでいた樹脂の芯をヤシ油にひたした灯をとす。130年間にわたってこの町を支配したポルトガル人も、このパタ・ランプで夜を過ごした。砦や商館や船で、ポルトガル人が揚げたパタタのじゃがいもと焼肉の夕食を楽しむとすれば、マレー人はヤシの葉葺きの家でパタタのサツマイモをゆで、魚を焼く。それに、香辛料で味と香りをつけた山盛りの米料理に、焼いた鶏をはじめとするいろいろな鳥料理に、果物に-----、パタ・ランプの赤い灯が、そうした料理の彩りをさらに多彩にしていた。

実際、料理の種類といい、量といい、味といい、香りといい、多彩さは旧大陸のヨーロッパの到底及ぶところではなかった。黄金の輝きでは負けない新大陸のインカ、アステク両帝国も、食べ物ではここアジアにはるかに劣った。

南米のアンデス山地で、家畜のラマの糞を乾かしたサキエを燃やし、ぼおっと青い炎が上がるのを灯に、トウモロコシの酒を飲み、ラマの肉をかじり、焼きじゃがいもをむさぼる夕食時のインカの人々は、マラッカの夕焼けとパタ・ランプに赤く映える揚げじゃがいも見ても、アンデス山地ではパパスと呼んだじゃがいもが、地球をほぼ一まわりした姿とは気づきもしなかったに違いない。

「家は一万戸、兵士だけで四千人、港には各国から

の船が常に百隻近く停泊し、ほかに小舟が二百隻ほどいつも往来している。

ポルトガルがマラッカ海峡を完全に支配する前年の1510年の様子を、事前交渉に派遣されて捕虜となり、のちにアルプケルケに救出されたポルトガル人ルイ・デ・アラウジョはこう報告している。

「金から香料まで、米から砂糖まで、絹からビロードまで、染料から樟脳まで、あらゆる物があらゆる東方の国々から集まり散る港町マラッカの豊かさは、食事時の料理の多彩さと、甘い言葉が好きな女たちに凝集されている」

それがヨーロッパ人がくる前のことだったとすれば、じゃがいもやサツマイモやトウモロコシという新大陸からの食物と旧大陸の料理法がもたらされたあとは、「料理の多彩さ」でも黄金半島といえたかもしれない。

しかし、「百隻近く停泊」していた船が集まり、散る先の国々がすべて「料理に多彩さ」に満ちていたわけではなかった。宝石のルビーをもたらすペグー(ビルマ)の奥地も、高価な綾織物を持ってくるインドの内陸深くも、山また山が重なり、米さえ十分に取れないところがあった。

じゃがいもは、マラッカからそうした山地へ散っていった。ヒマラヤの山裾の国ネパールで、耕地の四割近くにじゃがいもとトウモロコシが植ええられるようになったのは、17世紀の頃からのことなのである。

マラッカがそれほど賑わったのは、南アジアの海風のせいだった。インド洋から吹く風は、マラッカ海峡に入って消える。南シナ海からの風は、シンガポールを回ったところで静まる。ジャワ海からの風も、シンガポールで二手に割れ、弱まる。どの風もそこまでが力の限界、というところに港町マラッカはあった。

逆風でも航海できるヨーロッパの帆船でさえ、この風にさからって島々の間を縫っていくのはむずかしい。ジャワ島の北東にあつて、ニューギニア島に近いモルッカ諸島が丁香をはじめとする香辛料

の宝庫だということをつきとめたポルトガル船は、1513年3月14日にマラッカを発ったが、6月22日になってやっと帰り着くことができた。

オランダ船が、インド洋を突っきってスダ海峽から直接ジャワに着いたのは、ポルトガル船を避けるためばかりではなく、香辛料の宝庫モルッカに近道をとったからでもある。

しかし、そこでオランダ人が知ったのは、モルッカといってもいろいろで、なかには香辛料などほとんどない島もあれば、白人はもちろん近隣の国の人さえも寄せつけない島や、海賊や定期市を開くための島まである多彩さと、その東にはさらに多くの島々が横たわる広大なひろがりだった。

「東方とは、キタイ(中国)やヤパン(日本)のような北と、ジャワやモルッカよりも東の文字通り東方はるかまでのひろがりを目指すようだ」とオランダ人で初めてアジアに向かったリンスホーテンが記したのは、1583年から92年にかけてのことである。

それから半世紀後、リンスホーテンの東方のひろがりに航海したオランダ人タスマンは、ニュージーランドにまで連なる南太平洋の島々を確認した。1640年にはカンボジアから台湾、さらには日本近海まで航海したタスマンは、まさに東方のひろがりをめぐったことになる。

タスマンは、最初はジャワ西部のジャカトラ(ジャカルタ)、のちには東部のスラバヤを基地にしたが、土地で栽培させたじゃがいもを固パンと一緒に山ほど積んで、長途の航海に備えている。

「ジャカトラのイモを積んで、ベランダ(オランダ)人はみんな去ってしまえばいい」

オランダ船が出港するのを見ると、こき使われたジャワ人はため息まじりにつぶやいたものだが、その船のなかにはタスマンの探検船も入っていたに違いない。

だから、じゃがいもの生まれ故郷である南米のインカ帝国の人々が謎の消滅をとげたのは、スペインの征服者から逃れて南太平洋の島々に移り住んだ

のだという一部のヨーロッパ人の見方が正しければ、タスマンのこの東方を巡る航海で、じゃがいもは古なじみと再会したはずである。しかし、あふれる緑のなかにタスマンが見たイモは、アジア大陸から島伝いに渡ったヤムとタローだけだった。

南太平洋までいったじゃがいも自身で、インカの南太平洋移住説はもちろん、インカの祖先ピラコチャがアンデスから見れば西の海の南太平洋に去った、という神話さえも否定したことになる。

それにしても、アジアや太平洋の南の方で、新入りのじゃがいもやサツマイモはさておき、ヨーロッパ人が度肝を抜かれたといってもいいほど圧倒された多彩な野菜や果物が、どのようにして南方の暑熱に耐えて大陸沿岸に伝わり、大海原に点在する島々にも渡っていったのだろうか。

トメ・ピレスの乗ったポルトガル船でさえ、ベンガルとマラッカの間は片道で一か月は覚悟しなければならぬ長旅だった。人間でもうんざりする暑い旅なのだから、野菜や果物となれば腐りは早い。

ヨーロッパの船乗りが、長い航海というと恐れたのは新鮮な野菜や果物に含まれているビタミンの欠乏からくる壊血病だった。歯は抜け落ち、肌からは血がにじみでる。1519年9月20日、239人の船乗りを5隻の船に分乗させ、スペインのセビリヤ港を出帆して、史上発の世界一周航海に挑んだポルトガル人航海家マゼランは、翌20年10月末から11月初めにかけて南米大陸南端の海峽で苦闘したのちに太平洋に抜け、翌々21年3月にフィリピン群島に到着した。

(つづく)

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

1. 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9
100 años de historia de la inmigración
japonesa en Bolivia
を原典として2012年までを追補 在庫多数
2. 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12
コロニア・オキナワ入植50周年記念誌、
在庫2冊
3. 『ボリビアを知るための73章』 (第2版)
2013・2 明石書店刊行
上記は、1、2とも統一価格 2500円、
3は2000円 (いずれも税・送料込)
ご注文は下記当協会までメール又は電話でお名前、
ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡ください

admin@nipponbolivia.org 042-673-3133

お支払は銀行振込でお願い致します。

(口座番号、名義人は発送時ご連絡します。)

協会関係活動の近況

- 7月17日 日本人ボリビア移住120周年記念
式典 (ボリビア・サンタクルス市、ホテル タヒ
ーボ) にて式典実行委員会主催で開催・
眞子内親王殿下ご臨席、椿会長/首席随員、杉浦
専務理事/協会代表として参加
- 8月9日 ボリビア映画祭 (東京・西麻布・ラ
テンアメリカサロン)
ボリビアのウカマウ集団制作の「鳥の歌」を、
この映画の日本への紹介者・太田昌国氏の解説
とともに上映。会員・一般合わせて約30名参加
- 9月27日 ボリビア料理の集い
東京・築地・中央区築地社会教育会館調理実習
室) メニューはキヌアスープ、Chorrillana (牛
肉のピリ辛炒め煮)

協会活動やボリビアに関する今後の主なイベント予定

- 10月6日 BoliviaFestival2019 11:00-18:00
会場：東京港区・芝公園・23号地。
- 10月10日 (木) 日本人ボリビア移住120周年
記念コンサート：ピライ・ヴァカ (Pirai Vaca)
氏と猪居亜美氏のクラシックギター演奏
14:00 開演 会場：信濃町・民音文化センター
B2 ミュージウムホール
- 10月26日 (土) 日本人ペルー移住120周年企
画：ニッケイペルーに渡った私のおじいちゃん
映画上映 18:00 から 19:20 上映、
その後リレートーク、フリータイムあり。
会場：LIVE HOUSE LOFT 9 Shibuya (渋谷)
- 12月5日 (木) 当協会主催 X' Mas イベント
(講演+懇親会)：18:00～21:00 銀座のサロ
ン・ド・ジュリエ。講演：フォルクローレの成
り立ちと特徴 (仮題)、懇親会とフォルクロー
レ演奏、桑原健一氏とトリオ「東京リヤマ計画」

編集後記

暦の上では秋となりましたが、まだまだ暑い日が
続いています。当協会も引き続き、様々なイベン
トを通じて、ボリビアの社会や政治、文化など広
くお知らせしていきたいと考えています。

今後のイベント情報の詳細は、下記当協会ホー
ムページをご覧ください。トップページ右上には
ラテンアメリカに関する関連イベントも併せて掲
載いたしております。

<http://nipponbolivia.org>

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

Copyright© 2002-2018

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)